論文題目　　自然言語の証拠推量表現と知識管理

氏名　齊藤　学

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では，言語の意味というものを，外部情報の知識内への取り込みという観点から捉えることによって，真偽判断に基礎を置く従来の意味論では見過ごされていた数々の現象に統一的な説明を与えることができることを示す．例として主に扱っているのは，日本語のラシイ・ヨウダなどの推量表現であるが，本論文で提示する知識管理のモデルは，推量表現に限ったものではなく，言語一般ひいては「理解」一般に対するモデルの基礎となるべきものである．

推量と呼ばれる思考には，いくつかのタイプがあるということが知られているが，本論文で特に注目するのは，何らかの現象の理由や原因を推し量る「証拠推量」と呼ばれるタイプのものである．例えば，(1)の状況１のように「ドアの鍵が開く音を聞いた」場合，しばしば人は，その音がなぜ聞こえるのか，「証拠推量」を行う．

(1)　状況１：人質が，監禁されており外の様子が一切わからない状況で，ドアの鍵が開く音を聞いた．「誰か入ってくるようだ」

もちろん，(2)の状況２のように特に出来事がない場合でも人は推量を行うが，このような推量は証拠推量とは呼ばれない．

(2)　状況２：人質が，監禁されており外の様子が一切わからない状況に置かれている．「いずれ誰かが入ってくるだろう」

また，実際の出来事を直接体験するのではなく，言語情報に基づいて証拠推量が行われる場合もある．

(3)　状況３：人質 A が，監禁されており外の様子が一切わからない状況で，他の人質 B が「誰か入ってくる」と話したのを聞いた．「誰か入ってくるらしい」

ここで注目されるのが，推量のタイプによって特徴的に用いられる表現が存在するということである．(4a,b,c)は，いずれも状況１のもとでは使用可能であるが，状況２のもとでは(4a,b)は不自然となり，(4c)しか使用可能でない．

(4)　a.　誰か入ってくるヨウダ．
　　b.　誰か入ってくるラシイ．
　　c.　誰か入ってくるダロウ．

さらに，(3)の状況３では，(4b)は自然であるが(4a)は使いにくい．本論文では，様々な推量の例を通して，(5)の問いに対する答えを提出する．

(5) a. ヨウダの意味は，どのように捉えるべきか.
b. ラシイの意味は，どのように捉えるべきか.

(5)の問いに対する答えは，(6)にも答えるものでなければ十分とは言えない.

(6) a. なぜ，ヨウダは，状況１では使用可能で，状況２や状況３では使用不可能なのか.
b. なぜ，ラシイは，状況１と状況３で使用可能で，状況２では使用不可能なのか.
c. 状況１のもとで，ヨウダ(4a)とラシイ(4b)では，どのように意味が異なるのか.
d. そもそも，なぜヨウダやラシイが証拠推量を表すために用いられているのか.

(5)の問いに答えるために本論文で注目したのは，ヨウダの比況用法とラシイの典型用法である．

(7) ヨウダの比況用法
a. 子供のヨウナ大人
b. 太郎はまるで子供のヨウダ.

(8) ラシイの典型用法
a. 子供ラシイ子供
b. 花子は実に子供ラシイ.

(7a)は，「子供であるならば通常持つと思われるような性質（例えば、無邪気である、わがままである、など）を持った大人」という意味であるが，具体的にどのような性質を指しているかは述べられていない．つまり，(7a)の表現は，特定の性質を指示するというより，それが表す性質の条件だけが指定されているのである．このようなヨウダの意味を略記すると，(9)のようになる．

(9) 「αヨウダ」が表すのは，（不定の特性）βである．ただし，αが成り立つならば，通常，βが成り立つとする．

(8)でも，具体的な性質が指されていないという点では(7)と同様である．しかし，ヨウダの場合とは異なり，(8a)は，「子供以外は持たない、典型的に子供というものを規定する性質」を表している．つまり，この場合のラシイの意味は，次のように略記できる．

(10) 「αラシイ」が表すのは，（不定の特性）βである．ただし，αが成り立たないならば，通常，βが成り立たないとする．

本論文では，(9)と(10)が，それぞれヨウダとラシイの意味の根幹を成しており，証拠推量の用法も基本的にこれで説明できるということを主張する．ここで重要なのは，αが命題の場合，「αヨウダ／αラシイ」は，眼前の状況を記述する命題になっていなければならないという点である．ヨウダやラシイが，ダロウとは異なり，証拠に基づく推量でなければならないというのは，まさに，この性質によるものであり，本論文では，具体的にどのようなプロセスを経て，この推量が行われるかを詳説する．また，(9)と(10)のような記述によって，上で言及した，ヨウダとラシイの意味の違いがうまく説明できることを，数々の例によって示す.

本論文で提示している知識管理のモデルは，広い意味では談話管理理論の一種として位置づけることができるが，文の生成機構としての文法とその理解の関連をより明示的にし，新しい情報を知識の中に組み入れていくプロセスを具体的に示すことによって，この分野の研究の検証可能性をより高めることを目指したものである.